オピニオン

WHO 腫瘍分類：過去，現在，未来

稲垣　宏*

今日，腫瘍の病理診断・分類はますます多角的となり，ひとつの黄金律によってのみ行われることはない。すなわち腫瘍の病理診断・分類は形態学，免疫形質，遺伝子異常，臨床的特徴などを総合的に勘案して行われる。分類の細分化が進む今日，ひとつの疾患概念を世界の病理医・臨床医・研究者が正確に共有することは難しく，そのための道標となるのがヒト腫瘍組織型分類のための国際標準規約である「WHO 腫瘍分類」である。正確には WHO の下部組織である International Agency for Research on Cancer（IARC）が定めた腫瘍分類の規約である。IARC では世界各国の腫瘍病理や腫瘍生物学の専門家を集め，世界標準となる腫瘍分類法を策定する作業を定期的に行っている。その成果を病理アトラスとして WHO 腫瘍分類という名のもと刊行し，有償で各国に提供している。病理医のバイブルとも評されるこの WHO 腫瘍分類は伝統的に青い装丁の本であるためブルーブックとも呼ばれ，専門家はこのプロジェクトに手弁当で参加している。

歴史的には，1952 年に WHO Expert Committee on Health Statistics の下部委員会が各種ヒト臓器に発生する腫瘍の有用な分類に関する提言を示した。1956 年に WHO 執行委員会は腫瘍の組織学的な定義と基準に従った命名法に関するセンターの開設を検討するよう指示し，1957 年の第 10 回 World Health Assembly はそれを支持するに至った。各センターは 10 名以上の病理医から構成され，各臓器の代表的な腫瘍を選別し，100 枚以上の顕微鏡写真が用意された。1979 年までに 23 センターに 50 か国から 300 人の病理医が配置され，WHO 腫瘍分類の第 1 版にあたる “Histological Typing of Tumours” が刊行された。各版の巻数は版を重ねるごとに増え，第 3 版以降はタイトルに” WHO Classification” が明記されるようになった。第 4 版では 2006 年刊行の「中枢神経系腫瘍」から 2018 年刊行の「眼腫瘍」まで合計 14 巻が刊行された（中枢神経系腫瘍，血液系腫瘍において刊行された改訂版もこれに含む）。

現在この一連の書籍は第 5 版となり，2019 年に刊行された「消化器系腫瘍」から臓器ごとに順次刊行され，これまでに 11 巻が刊行されている。第 4 版まではそれぞれの領域の専門家が中心となり，比較的自由に執筆していたが，第 5 版は編集委員会が主導する最初の版となった。これを反映してか，第 5 版では項目が標準化され，定義，ICD-11 コード，臨床的特徴，病理学的特徴など，約 17 項目が並べられている。第 4 版と比べると文字数も削減されるなど読み物的な要素が排除され，多数のカラー画像を含む簡潔な病理アトラスとしての性格が強調されている。

第 4 版では合計 14 巻の完結まで 13 年かかったが，残念ながら，時間がかかりすぎと言わざるを得ない。第 5 版では医学の進歩に合わせ，5 年で一つの版を終えたいとしている。しかし進歩のスピードを考えると，5 年でも遅いような気がする。幸い第 5 版では新たな試みとして，有料ではある

* Hiroshi Inagaki：名古屋市立大学大学院医学研究科
臨床病態病理学

がWEB上でもWHO腫瘍分類の閲覧が可能となっている。このシステムを利用して，新たな知見を迅速に反映した改訂版が，遅れることなく世界に届けられるような体制が切に望まれる。

利益相反

本論文に関して，筆者が開示すべき利益相反はない。